



お嬢様は
Aがお好き!
OJYOUSAMA LOVES A!

小説 あらおし悠
挿絵 つかこ

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

序章	お嬢様の結婚宣言！	006
第一章	そつちで初体験!?	017
第二章	悩めるお嬢様と初めてのAキス	060
第三章	着物でスパッツでパーティードレスで	102
第四章	お嬢様と初デート	151
第五章	お嬢様と秘密で最後のエッチレックスン	195
終章	お嬢様の次なる計画	243

登場人物紹介

Characters



そのべま^りか 園部麻里華

学園では高嶺の花のお嬢様。
今回お見合いすることになったもののそれを嫌がり、直雪を使って極秘計画を企てる。



きりのみ^さ 桐野美紗

園部家に代々仕えるメイド。
怒ると怖いがいつもはどこか
かたぼけた感じ。エッチに
関しては指南役にも。

ふじい^なおゆ^き 藤井直雪

麻里華に憧れる、ごく普通
のお尻好きな少年。

呪文のような囁きは、性欲中枢に直接語りかけるかのようだ。思考は全て下半身に吸い取られ、どんなプレイを楽しむかしか考えられない。パイズリは美紗の方が向いているかもしれないが、胸と口は、さつき麻里華で味わった。だからここは。

「お……お尻、で……」

「ふふっ、かしこまりました」

クスツと笑って、直雪の背を壁に押しつけた。身体を重ねるように彼女も背中を見せ、両手でお尻を掴ませる。ピッチリしたスパッツに包まれた、美紗らしい大きくて柔らかな尻肉。露わになった艶かしい曲線が、直雪の劣情を駆り立てる。ドアの外では麻里華いるメイド隊が、一糸乱れぬ動きをしているであろう音が響き続けていた。あの少女の肢体に射精したばかりだというのに、もう別の女性のお尻に触っている。浮気な自分を諫めるより、ハーレム気分の優越感が、性欲の強い少年の心を侵食していった。

「んふ。もつと強く揉んでください……」

くねる背筋とうなじが、切り揃えられた揺れる黒髪が、甘ったるい女性の匂いを煽りたてる。直雪は彼女の首に鼻を近づけ、媚薬のような芳香を胸いっぱい吸い込んだ。

「ん、はあああ……」

あまりの芳しさに、美紗の尻肉をぎゅっと鷲掴みにしてしまう。

「あんっ！」

「ぞ、ごめんなさい……！」

だが美紗は痛がる様子も見せず、蕩けた笑みで振り向いて胸を揉ませた。ふにゆりとまろやかな手触りが、股間の肉棒をますます硬く、激しく、どくどくと脈打たせる。

「あふ……直雪様のが、わたくしに当たって……力強い……」

お尻に感じる少年の性器の熱さに、うっとりとはやくメイドさん。大きなお尻をくねらせながら、コチコチの剛直に擦りつけてきた。脚を開き、膝を屈伸させ、麻里華の胸よりも深い谷間を滑らせる。さらに複雑な捻りを加え、根元を刺激するのも忘れない。

「どうですか直雪様……。わたくしのお尻は気持ちいいでしょ？」

「はっ……はくッ！ はいッ……き、気持ちいいですっ!!」

敏感な裏筋を、スパッツの生地がザラザラと撫で上げる。感じたことのない触感に顎を上げながら、切羽詰った吐息を吐いた。寧丸も転がされて痛いくらいなのに、その中から快感を覚えてしまう。

「んっく、あッ……お尻……美紗さんのお尻イ……ッ!!」

喘ぎながら、美紗の美貌に頬を擦りつけた。キスしそうなほどに唇が接近し、彼女の甘くて熱い吐息を、舌に乗せて掻き集めた。

「こっちも……おっぱいも触ってください……」

両手をTシャツの中に挿し入れる。掌に張りついてくる、しっとりとした肌。揉みしだき甲斐のあるたっぷり乳房が、ずっしりとした重量感で楽しませてくれる。だが、このダイレクトに伝わってくる感触は。

「み、美紗さん、ノーブラ!？」

クスリと微笑んで、Tシャツを捲り上げた。ミルクタンクとでも呼びたくなるようなメロン大の二つの乳房が、細い身体からはみ出さんばかりにポヨンと弾んでまろび出る。肩越しに覗き込んだそれは、量感の割に垂れ下がったりせず、尖塔のような紅い肉ポッチがツンと上向きで勃起していた。

「……さあ、どうぞお好きに……ああん!」

美紗が言い終わらないうちに、背後から両手でしがみつく。掌で掬い上げると、その重さが実感できた。先端を二本の指でクリクリ捏ね回す。彼女の乳首は意外に大振りだが、なにしろ載っている土台が大きいので、むしろ相対的には小さく見える。指が埋まりそうなふわふわマシユマロおっぱいを、余すところなく堪能した。

「あふん……は……ん……。直雪様の手、優しくて、好き……です、あん! もっと激しく揉んで……わたくしのおっぱい、くにゅくにゅして……そうもつと、あん、あんっ!」
蕩けそうな甘ったるい喘ぎが抑えきれず、美紗は切なそうに肩を竦めて指を噛む。直雪の下半身も、お尻による立ちバック素股でクライマックスを迎えようとしていた。胸への愛撫に合わせてくねり方も複雑になり、カリ首や付け根が刺激された勃起は先触れ液をしとどに漏らして美紗のスパッツをベタベタに汚す。濡れて滑りのよくなった布地が、ペニスにさらなる追い込みを掛けてきた。

「美紗さん……美紗さんッ……!」



直雪の腰も上下左右に踊り狂う。膝がガクガクと震え、ラストスパートに向けて摩擦を強める。しかし夢中になりすぎて、外の音楽がやんでいるのに気づかなかった。パンツと怒気を孕んだ音で更衣室のドアが開き、ツインテールを逆立てた少女が、恨みがましいオーラを纏って立ちはだかる。

「やっぱり、そうじゃないかと思ってたのよ！ 早目に切り上げて正解だったわ！」

メイドたちは引き上げたと思えて、フィットネスルームには誰もいない。ここがお嬢様専用ロックスカールームでなかったら、どうなっていたことか。しかしそんなことは問題ではなかった。嫉妬を剥き出しにした麻里華が、愛撫を交わす二人にズカズカと歩み寄り、美紗と同様に、スパッツのお尻を擦りつけてきたのだ。

「藤井君は、あたしのお尻で気持ちよくなるんだから！」

「あら、直雪様のおちんちんで、お嬢様のお尻が気持ちよくなるはずでは？」

何を競っているのか知らないが、二人はペニスを奪い合うように、交互にヒップを押し当ててきた。

「ちょ、ちよつと二人とも……あひッ！ そ、そんな一緒になんて……ほあああつ！」

二人分の女体に揉みくちやにされ、溺れたように酸素を求めて喘ぎもがく。美紗の甘い体臭に、麻里華のうなじから立ち昇る汗の匂いが加わって、狭い更衣室はたちまち淫靡な空気で満たされた。絶頂直前だった肉棒は、急角度で快感曲線を駆け昇る。

「ほら、あたしのお尻の方が気持ちいいでしょ!？」

「いいえ、わたくしの方ですわ」

美紗の吸いつくような尻たぶも、麻里華の弾むようなヒップも、それぞれに魅力的で気持ちよすぎる。どっちがいいなんて決められない。スパッツのザラザラも手伝って、疼くような快感でペニスが無責任に悦んでいる。

「どっちがなんて……こんなの……凄っ……ひうあっ！」

「んふ……こんなのはいかがです？」

美紗のお尻が亀頭に押し掛かり、布地越しに尻穴で鈴口をくすぐった。麻里華も対抗心を燃やし、肉の谷間で睾丸を転がす。快感が疼きからビリビリと感電するような刺激へと変化して、男性器を追い詰めた。

「どうなの藤井君！ どっちが気持ちいの!？」

「気持ちいい！ どっちのお尻もよくて……よすぎて……あああッ！」

二人のスパッツ尻に揉みくちやにされ、ペニスが跳ねた。快感の限界点を越える。カリ首の笠が開いて、白濁粘液が派手に飛び出し、あまりの熱さに麻里華が叫ぶ。

「あんっ！ お尻、あつっうううい！」

噴火した灼熱の白溶岩が、腰といわず、お尻といわず、二人の背中に撒き散らされた。少女の歓喜の音がさらに大量の精液を吐き出させ、直雪は腰を踊らせて、粘度の高い精液をスパッツにグチュグチュと擦り込んでいった。

「……あーあ、こんなに汚して……。誰が洗濯すると思ってるのですか？」

少し気分が悪いので……退席しても、よろしい……でしょうか……あうんっ……」

途切れ途切れな吐息の中で、ようやく答えるお嬢様。こんな状態でも体面たいめんを取り繕える麻里華に、直雪は心底感心した。

「そうだな、子供はもう寝る時間だ。……お集まりの皆様！」

父親の挨拶が終わらないうちに、麻里華は会場を飛び出していた。スカートの中の直雪も、膝を抱えながら彼女のスピードについていく。万が一にもお嬢様のスカートの下から発見されたら、間違ひなく犯罪者にされる。社会的に抹殺される。置いていかれないように、ここは必死にならざるをえなかった。

視界が完全に遮られていたせいで、転びはしないかとヒヤヒヤしていたが、どうにか二人の居城である別館に戻ってこられたようだ。誰かに見咎められなかったのは、奇跡としか言いようがない。

「いつまで入ってるのよ！ とつとと出なさい！」

淫靡な香り漂う、スカートの中という魅惑空間を名残惜しく堪能していたら、お嬢様に蹴り飛ばされた。

「ぶはあ！ 生き返ったー！」

久々の外界は麻里華の部屋だった。新鮮な空気を吸って、晴れ晴れとした気分になる。あれだけの悪戯をした後ではあるが、さすがに生きた心地がしなかったのだ。しかし、背後からどす黒い殺気を感じ、直雪は再び生気を失った。

「……よくも、あたしに恥をかかせたわね……！」

「ごっこ、ごめんさいッ！」

ついつい調子に乗りすぎた。慌てふためき土下座する。怒りに全身を打ち震わせる姿を想像し、恐る恐る顔を上げたが、様子がおかしい。

「……園部さん？」

顔に紅が差している。ぽーっと眠そうな眼をして、半開きの乾いた唇を、テラテラの舌が何度も何度も湿らせる。

「あ、あなたが変わることするから……あたし……あたし……！」

直雪は息を飲んだ。麻里華は引き千切るようにドレスを脱ぎ捨て、コルセットやガーターベルトを締めたまま、ベッドに四つん這いになったのだ。くねくねと淫らな動きで腰をくねらせ、シルクのパンティーまで床に放り出す。

「あなたのせいで、あたし……ガマンできない！ 舐めて！ お尻舐めて！」

あられもないことを叫びながら、早く早くとお尻を振りたてた。誰もが彼女に注目する誕生パーティのど真ん中、衆人環視でお尻の穴を責められるという異常事態が、怒りを通り越して異様なまでに発情させていたのだ。そんな麻里華のいやらしい格好に直雪も昂ぶり、我を忘れてぷりぷりのヒップに飛びつく。

「そ、園部さん！ んじゅ、じゅぶるるるるるーっ！」

「ああんッ、いきなり……す、すご……あつあつすごいいいいいいいっ！」

前戯の必要も余裕もない。両手で乱暴に尻肉を押し広げると、大きく口を開いた窄まりに、唾液を飛ばしながら吸いついた。勢いのあまり性器にまで舌を伸ばしかけたが、ペチンと尻たぶで頬を打たれ、欲情しているとは思えないほど鋭い声で咎められた。

「ダメッ！ 悪戯した罰よ！ あなたが舐めていいのはお尻だけ！」

仕方がないが、そんな罰に不服があらうはずがない。そういった意味では、直雪も彼女のお尻に調教されているのかもしれない。嬉々として肛門に舌を挿し入れて、粘つく腸壁をたっぷり味わう。

——じゆる、ずばっじゅぶじゅぶ、じゆるるるッ！

「か、感じる……いつもより、すごくっ、い、ひいあああつ！」

シートを握り締め、枕に涎を垂らしながら悦ぶ淫乱お嬢様。はしたなく腰を振り、少年の舌を奥に奥に誘い入れる。毎日熱心に快感調教を受け続けた麻里華のアヌスは、まるで欲情に蠢く女性器のように、性感帯として開花していたのだ。

「ああん、もつと……もつとお！」

「……ん、んむあ……いいよ園部さん、ちゆるっ！ 声……声、もつと聞かせて……ん、んむっ……ちゅばっじゅばッ！」

興奮していたのは麻里華だけではない。彼女の匂いの籠もった空間に閉じ込められていた直雪も、はち切れそうな欲情を溜め込んでいた。ただ舐めるだけでは物足りない。満たされない。お嬢様をもつと淫らに染め上げたい。

「ぷはっ……はああああ……。もつと気持ちよくしてあげるよ……」

「きゃッ、やあん！」

直雪は麻里華の身体をひっくり返して仰向けにすると、その膝を肩に担いだ。股間が彼女の顔の真上に来るまで腰を持ち上げる。これも美紗に教わった体位のひとつ。屈辱的な彼女の姿に眼を剥いていた麻里華だったが、自分がやらされるとまでは想像していなかったに違いない。露を含んだ髪を綻ばせた幼い淫裂と、おちよぼ口のようなお尻の穴の窄まりを、彼女自身に見せつけた。

「ほら見て、園部さんのお尻。ああ……とつても、綺麗だ……」

「バカバカバカッ！ こ、これはダメッ！ これ、恥ずかしすぎるう！」

暴れる脚が、直雪の背中をぼかぼか叩く。しかし、下から見上げる潤んだ瞳は、羞恥さえ快感に転換されると告白しているようなものだった。痛いほどいきり立ったペニスを濡れた秘裂にあてがう。裏筋にたつぷりと愛液を含ませると、お尻の割れ目に沿って一気になぞり上げた。

「ひっふあああああああつ!!」

肉棒を女性器と肛門の間で往復させる、男が動く強制素股。麻里華が背中を反らせたせいで、肉樹の裏筋が大陰唇を割って、肉襷の間に深々と埋め込まれた。直雪は、まるでノコギリでも挽くようにペニスを擦りつけ、少女の恥部を味わい尽くす。

「……そ、園部さんのが……柔らかいのが絡みついて……ふあああああ！」

「や……おちんちん……や、やらしい……」

前に突き出せば二枚貝のような秘肉がペニスの下半分を啜え込み、しぶいた愛液が絡みついて、ぬらぬらと妖しく光る。後ろに引けば肛門がキスするように吸いついて、甘い疼きを擦り込んでいく。いつしか麻里華の薄い腹も波打ち、腰を淫らに踊らせていた。

「こんな格好、恥ずかしいのに……どうしてえ……？ あ、あたし、すぐく……すぐく感じちゃうよお！」

困惑の表情を浮かべながら、ドレスを捨てて剥き出しになった乳房を揉みしだく。大きく開いた脚の間から覗く、麻里華の上気した顔。その上に、直雪の先触れ液と、彼女自身の愛液がポタポタ落ちて、淫液の化粧を施す。

「気持ちいいよ園部さん！ お尻もあそこも……はあつくうッ……！ か、絡みついて、くるッ!!」

ぐちゅぐちゅと粘った音を立てる女性器が、堪らなく心地いい。あまりの快感に、まるで本当のセックスをしているかのように腰が動いた。

「な、なに？ 大きいのが……おっきいのがああ！」

麻里華の身体も熱っぽく汗を滴らせ、お尻がくねくねと淫らな円を描く。

「お、お尻い！ あそことお尻、あああああ熱ういいっ！ 熱いよおおッ！ 藤井君もつと、もつとお尻っ、お尻擦って、気持ちよくして……ひ、ひ、ひううああッ!!」

内腿にキュッと力が入った。脚が首の後ろで交差して、直雪の身体を抱き寄せる。直雪



高慢なお嬢様が情けない声を出す。お尻を可愛がってもらえない——そんなことでガツカリするほど調教が進むとは、直雪も、何より当人も思っていないに違いない。桃色に色づく尻を指の先ですいっと撫で上げ、恥ずかしい性癖の告白を強要する。

「ひあん！ そ……そうよ、あたし……興奮してた……してたのお！ ……パンツを脱いで、街の中を歩かされて……。見られたら、きっと嘲笑われるって思ったら、不安で、怖くて……それなのに……あ、あそこと、お尻が……お尻があ……ああん！」

そんな場面を想像してしまったのだろう。触れてもいけない秘唇がうっすらと開き、新たな淫液を、粘った音を立てて、とぶとぶつと吐き出した。

「お尻がジンジンして……疼いて……ああっ、もう、我慢、できない……ッ！」
ガクガクと膝が笑い、今にも倒れ込みそうになる。そのヒップを下から支え、括約筋の痙攣する尻穴を、縁に沿ってグルリと舐めた。

「ああ……ンンンンンッ！ あッは……はあひうあんンッ！」

待ち望んでいた愛撫を受けて、麻里華の背中が歓喜に震える。しかし、この場では思い切り嬌声を上げることができず、漏れそうになる快感の声を、唇を閉じて必死に抑え込んでいた。頭を上下左右に振りたてて、ツイントールが狂ったように乱舞する。少女の小さな肢体は深い快楽と苦悩に同時に襲われ、このまま気が触れてしまうのではないかと思うほど、背中がよじれ、柔らかかお肉のヒップがヒクヒクと強張った。

「あひうん、もつと……ダメ、それ以上されたら……でも、やあああッ！ 深く、奥まで

……んきゅああん！ 舌、捻じ込んで、ああん、ダメ、もつとお！」

自分でもどうすればいいのかわからないのだろう。快感の嵐に翻弄されて、言うことが支離滅裂。しかし直雪は、責めを緩めるつもりはなかった。彼女のお尻を、徹底的に、性器と同等の性感帯に仕上げるのが、自分の役目だから。

「べろべろ、ちゅっ！ 園部さんのお尻……とつても可愛いよ。僕に舐められて、こんなにヒクヒク動いて……。ちよつと塩辛いけど……ちゅぷ、とつても、美味しいよ……」

「バカバカ変態！ お尻が美味しいなんて、あなた、どうかして……あ、ひいいん!!」
「でも、感じてるんでしょ？ こんな場所でお尻舐められて、そんなによがって……。ほら……鏡を見てよ。とつてもいい顔してる……」

直雪に促され、のろのろと大きな姿見に顔を向ける。そこに映っていた、痴態を見せる少女の姿を、麻里華は羞恥と歡喜の混じった表情で凝視した。

「や、ああああん……あたし……こんな……いやらしい……悦んでる。あたし、お尻舐められて、こんな……こんな、ふああああん！」

とろんと蕩けた瞳に、だらしなく緩んだ唇。涎を垂れ流し、肛悦に酔った恥女。恥じ入り、耳まで真っ赤になりながら、はしたない自分から眼を離せなくなっている。

「あたし、悦んでる……お尻舐められて、弄られて、いっぱい、いっぱい感じて……あ、あたしも、変態になっちゃったよお！」

だがそれは、彼女自身が望んだこと。麻里華は腰を突き出し、括約筋をひくつかせ、颯

る舌を痛いほど締めつけきた。

「しゅごい……お尻しゅごい……あ、あ、ああ……気持ちいい……いいいい……！」

満員電車の痴漢プレイ、そしてノーパンでの街歩き。刺激的すぎる辱めの連続で昂ぶったところに、鏡で痴態を見せつけられ、完全に快感の虜とりになってしまったようだ。

「ね……ねえ、藤井くん……」

気味が悪いほど可愛らしい、甘えた猫撫で声で、媚びるように肩を竦ませ振り返る。そして願ってもない——いや、直雪が常々願っていた行為を、おねだりしてきたのだ。

「……………挿れて」

少女の小さな眩きが、直雪の心臓を大きく跳ね上がらせた。

「……藤井君のおちんちん……。あたしの……ここに……」

ズクンとペニスが激しくときめく。放置されて拗ねていた分身に、ありえないほどの力が漲る。自分で大きく尻穴を開き、少年の肉棒で肛姦を求め美少女の姿に。

（そ、園部さんの、お尻に……肛門に……）

初めての夜、美紗にたった一度教えられただけで心奪われてしまった女性の恥穴。女性器よりも先に覚えてしまった禁断の快楽。もちろん、秘裂への興味は尽きないが、初めての経験で知ってしまった悦楽の味は、忘れようにも忘れられるはずがない。いつかは麻里華ともとは夢見ていたが、まさか、こんな場所で、しかも彼女から求めてくるなんて。

扉の向こうから、店内のざわめきが聞こえてくる。だが直雪の意識は、眼前で桜色に染

まる肉丘に集中していった。ぱっくりと広げられる窄まりに、ゴクリと大きく喉が鳴る。

「いいの……？」

「こ……これは……違うの！」

迂闊に確認してしまったせいで、麻里華が我に返った。良家の娘にあるまじき、はしたなくて恥ずべきことを口走ってしまったことに。慌てて振り返り、言い訳を探している。これには直雪も焦った。やっぱりやめたなんて言われたら、肉棒に満ち満ちた期待と欲求はどこにぶつけたらいいのかわからない。

「これは……だから、調教の続き……総仕上げよ！ あなたの……いやらしいそれで、あ……あたしの、お尻……思いつきり、感じさせてみなさいよ……っ」

さっきの可愛らしいおねだりとは趣おもむきが違うが、精一杯の強がり、改めてペニスを、直雪を求めてきた。挿入なしの危機が杞憂で済んで本当によかったと、胸を撫で下ろす。

「それじゃ……いくよ……」

眼を閉じて、コクンと小さく頷く麻里華。小さく息を吐きながら、初めて迎えるその時を待ち構える。

（ええっと……どうすればいいんだっけ）

あの時は、全てを美紗に任せていた。だがここは、一度きりとはいえ経験者である自分がリードしなくてはならない。

早く麻里華のお尻を味わいたいと、ペニスが疼いて催促する。しかし、女性器と違って

肛門はぬめりが足りない。このまま挿入するには摩擦が大きすぎる。はやる気持ちを抑えつつ、はち切れそうな勃起を握り締め、淫裂に擦りつけてたっぷりと露を含ませた。

「あ……ううん……。じ、焦らさないで……。意地悪しないで……」

悩ましげに首をくねらす麻里華だが、焦らされているのは直雪の方。温かい蜜が纏わりついて、ますます元気になった肉槍の穂先を、小さな窪みへピトッとあてがった。

「あ……」

粘膜同士の接触がもたらす甘い痺れに、二人の吐息が狭い小部屋にこだまする。久しぶりの、そして初めて肉棒で知るお嬢様のアヌスは、触れるだけで亀頭が甘く疼いた。日々の訓練で柔らかくほぐされた尻穴が、まるでキスするように吸いついてくる。

先端が触れているだけなのに、まるで鈴口から流れ込んでくる快感に操られるように腰が動いて、彼女の中へとペニス^はが埋め込まれていった。

「挿^は入る……挿^は入る……挿^は入る……」

肛門周辺の肉を巻き込むように、剛直が少女にめり込んでゆく。だがそこは、異物を受け入れるようにはできていない排泄専用器官。いくら快感慣れしていたとはいえ、勃起した男性器は容易には進めない。肉欲に滾った亀頭の段差が、最初にして最大の難関。そこさえ過ぎればと、麻里華のか細い裸の腰を驚掴みにして、強引に押し入った。

「ん……むううつく……はぐつ……ふあうつぐうううッ!!」

麻里華は額に脂汗を浮かべ、血の気が引くほど拳を握り、初めての挿入に耐える。しか

しそれが逆に、直雪の侵入を困難にしていた。

「そんなにつ……力を入れないで……楽にして……」

アドバイスを受け、大きく深呼吸する麻里華。そこに、括約筋から力が抜ける一瞬が生まれた。その機を逃さず、一気に挿し入れる。カリの段差がきつい入り口をガクンとすり抜け、勃起の全てが根元まで全て埋まる。

「はッいったぁー……あ、あああああつ……!!」

か細い悲鳴を上げながら、麻里華の背中が折れんばかりに大きく仰け反った。ぷるぷると細かい肢体の振動が、結合部からダイレクトに伝わってくる。

「お……おっきいのが……あたしの中で……あ……あああああたしの中でええええ！」

麻里華は唇の端から涎を垂らし、体内を犯す男性器の感覚に戦慄していた。初めて受け入れた男の性器。女性器にはないにせよ、大きな肉の塊が自分の内側に存在する違和感に、戸惑いを隠せないでいる。

「はうっぐ……そ、園部、さん……っ！」

そして同時に、直雪も強烈な感覚に耐えていた。何重にも巻いた輪ゴムのようにグイグイと締めつけてくるお尻の穴に、ねっとりとした纏わりついてくる腸壁の柔らかさ。ほんの数センチにすぎない肉棒が、苦痛と快感を同時に味わい、混乱の極みに達していたのだ。

「大きい……何か……息、苦しい……」

異物感に嘆息する小柄な少女。だが麻里華のアヌスは、出血も見せずに極太勃起を難な

く飲み込んでいた。舌や唇での訓練が生きているのか、鏡に映る麻里華の顔から、次第に苦悶の表情が消えつつあった。

「はふ……ふあつふ……。変……何か……変だよ……。あたしの中に、大きいのが……
とつても息苦しいのに……なのに……」

直雪を締めつけている直腸壁が蠢き始める。お尻の肉が、肉棒をキュッと抱き締める。

「あ、はああああ……。き、気持ち……。いい……！」

訓練の賜物か、直雪よりも麻里華が先に快感に目覚め始めた。前後に振った腰が徐々にスピードアップし、肉の摩擦を食欲に貪る。

「ま、待つて園部さんッ！ そんなっ急に動かれたらっ……！」

情けない声で彼女を制しようとするが、肉棒を包んだ直腸肉が温かくて、あまりにも気持ちよくて、つられるように硬直肉槍で彼女のお尻を突き出した。

——じゅずつ、じゅずつ、ずるるっ、じゅぶずぶずずッ！

絡みついてくる腸壁、締めつけてくる肛門。初めての挿入に強張って、肉棒をキュウキユウと押し潰す。直雪は美紗との時を思い出しながら、肉棒全体を腸壁に擦りつけるように、硬勃起をお尻に捻り込んだ。

「はぎゅッ、ひっいんっ！ き、きついッ……ふつきゅううああううあああつッ！」

麻里華の身体も前後に動く。台に額を擦りつけながら、挿入快感に没頭する。

「おしっ……お尻、なのにつ……あたし、こんなに感じて……はッきゅううああん！」

後ろの処女。アナルバージン。初体験がお尻というアブノーマルプレイに苦悩するお嬢様。だが、喘ぎ声に嫌悪感は見られない。調教の総仕上げと彼女が言った通り、完全に肛門快感の虜になっていた。それはそれでいいのだが、漏れ出す声が抑えきれなくなっている。このままでは外の誰かに気づかれてしまう。

「園部っさんっ！ 声……声大きい……！」

「でもでも……あひあッ……どうしよう、出ちゃう、あはう……声出ちゃう……ッ！」
分かってはいるのに、二人とも身体が止まらない。ピストン運動の気持ちよさに操られ、自分で自分を制御できない。

「園部さん、ハンカチか何か……」

懸命に搾り出した直雪の声に、麻里華はガクガク震える膝に鞭打って、スカートのポケットから何か取り出す。

「そ、それは……!?」

出てきた白い布切れに、直雪は驚愕した。それは、さっきまで彼女が穿いていたシルクの下着。電車の中で精液まみれにされたそれを、躊躇もせずに可憐な唇に啜えた。

「ふぁ……変な臭い……？ あはう……な、何よこれえ、ハンカチじゃない……!? むふ……ふむあぁん……」

どうやら本気で間違えたらしい。まさか、脱いだ下着をそのまま突っ込んでいたとは。スカートの中も、そして麻里華の口の中も、青臭い臭いで充満しているはず。だが、彼女

の鼻はそれを深く吸い込んで、蕩けた瞳はますますトロンと垂れ下がった。

「あふ、あ……臭あい。へ、変な臭おい……。藤井君のふえ、精液のにふおい……。お口に
いっばい……。ふあふ……。んむつふあああああつ！」

「園部さん、その顔……素敵だよ！ とつても可愛い、いい顔してるッ！」

「ふ、ふえ……？」

背中に押し掛かり、嘔きかけて顔を横に向けさせる。自分の下着を舐め回しながら、突き出したお尻を貫かれている、快感に呆けた少女の映る大きな鏡に。

「ほら見て。園部さん、僕の精液つきのパンツを舐めて、お尻で僕のを飲み込んで……。あ
あつ……。とつてもいやらしくて、スケベで、可愛いよ……」

「やあ……。やあああん！ あ、あらひ、すけべりやないもおん……。ひゅあつ！ あらひ、
ふ、ふじいくんみたいな、ふああん！ へ……。変態りやないもおおおん！」

声を震わせ、必死にスケベを否定しながら、しかし下半身は、何より彼女のお尻は正直
だった。直腸の肉壁が蠢いて、直雪のペニスを抜き始める。初めての挿入とは思えないほ
どの激しさで、くちやくちやと美味しそうに舐めしやぶる。

「ふ、ふじいくんので……。おひつ、おひりい……。うじゅくつ……。しびれ……。るう！」

「そ、そんな激しく動いたら……。はくうッ！ 園部さん、がッ、こわ、壊れちゃうよ！」

そう言いながら、彼女の身体を氣遣う余裕など、童貞も同然の直雪にあるはずがなかつた。挿れたくてウズウズしていたお尻に突っ込んでいる感激で、自分の快感を追い求める



ので精一杯。カリ首の段差が肉筒と擦れるたび、頭の中から何かが零れ落ちる。肉欲を求めだけの牡に成り下がる。粘りつくような腸壁との甘摩擦に夢中になって、お尻が真っ赤になるほどパンパンと腰を打ちつけた。

「園部さんのお尻っ、お尻ッ！ 気持ちいいッ！」

「あ、あらひも、おかしくなりゆ……き、きもちよすぎてえ、バカになっちゃう……ひふああん！ あふ、むあん、うふ……うふ……藤井君のおちんちん……もう、あらひの、あんッ！ あらひの、なんらからあ……。あらひのお尻の、なんらからあああ！」

麻里華が濡れた瞳で振り返る。肉棒を啜えたお尻を媚びるようにくねらせて、乾いた唇を、無意識にべろりと舐める。幼さを残す顔立ちと色気のギャップに、直雪はゾクゾクとした甘電流に脳天まで貫かれた。肉竿が疼き、睨丸が強張って、今にも欲望の塊が噴火しそうな危機感が襲い来る。

「か、可愛い、気持ちいい！ あ……あああああッ！ 来るっ！ で、出そう！」

「い、いいわよ出しなさいっ！ あひッ、はふああ！ あらひのお尻に、いっぱい！ あああたしも、イク、お尻で……おひッひはふっ……このあらひが、お尻で、イッチャウ……お尻、おひりい！」

麻里華も絶頂が近いのか、揺れるうなじが、噴き出す汗で鈍く輝く。背中が反り上がった、啜えたペニスを腸の奥まで引き擦り込む。

「園部さん、いくよっ、お尻に……あうっ出る……出るッ!!」

腰が溶けるほどの快感を纏わせながら、一番根元まで撃ち込んだ。濃縮された粘液ミルクを少女の体内に解き放つ。

——どびゅどびゅ、どびゅるるるううううっ！

「ふあっ!? お尻、熱ッいいいッ! ふっみゅうふあふうあうああみゅうううッ!!」
直腸への中出しに、麻里華も大きく仰け反った。精液パンツを夢中で噛み締め、漏れ出す声を抑えながら絶頂快感に全身を痺れさせる。

「あ……ああ……お尻……最高お……」

脱力して台に突っ伏す麻里華の背中に、直雪も重なった。彼女の唇とパンツの間に、精液と唾液のブレンドされた粘着橋が架けられるのを、ぼんやりと眺めながら。

「お客様、試着の方はお済みでしょうか？」

だがそこへ、コンコンと扉を叩いて店員さんらしき声が尋ねてきた。あまりにも長く入り浸っていたせいで怪しまれたに違いない。

「は、はい……むぐっ」

危うく直雪が返事をしそうになって、慌てた麻里華に口を塞がれた。

「え、ええ大丈夫! そ、そうだわ、せつかくだから他のも見せてもらおうかしら!」

快感の余韻に浸る間もなく試着室を飛び出す。そこにいたのは、ニコニコ微笑む、スーツ姿のメイドさん。

「お疲れ様でした、お嬢様」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評
発売中



「…藤田君は責任取るべき」
睡月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫
[小説・さかき傘 / 挿絵・天海雪乃]



全国書店で
好評
発売中



「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです
[小説・酒井仁 / 挿絵・にのこ]



女幹部メル様の
セカイ征服計画!
[小説・高岡智空 / 挿絵・鈴眼依縫]

2010
8月下旬
発売予定!!



悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!

既刊LINEUP ● 仙聖字戀姫ノブナガツ ①～③
● 灼爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
● BLANGEL 輪になりに語る愚者の夜

● 借金お嬢小姐 ①～③
● プリンセスリパージ! 交錯する美姫と魔姫
● 無敵の姫騎士がDMICに目覚めたようです

● ビルグリムメイデン ①～②
● 呪詛喰らい脚!カースイーター!
● 魔海少女ルレイエール

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!